婦人と新社會

山田わか主筆

拾貳月號

毎月一回一日發行　第拾號　大正九年拾貳月壹日發行

東京　婦人と新社會社發行

婦人と新社會



基督の降誕を祝して此の號をクリスマス號と致しましたに際して、男性文明の末路を説き、女性文明の誕生を宣言し得たことを喜びます。基督は性別から云へば男性であります。けれども、我々普通人の性別には超越した神の子である基督は女性的な處を多分に持つてゐました。

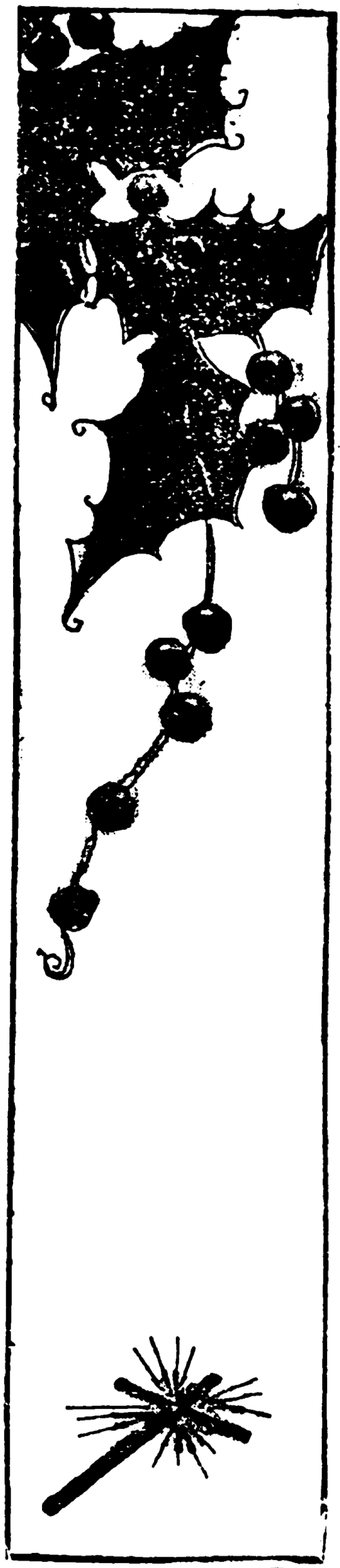
弱者をいたわる、殊に、幼き者をいつくしむ優しい温い基督の態度を見て、誰か喜びに胸をふるはさないものがありませう。

女性の力を發揮する時は來ました。愛情の價値を人は認めなければならぬ時が來ました。

基督の降誕を祝すと共に女性の力の價値を高調し得たことを私は喜びます。

クリスマス號

男性文明の末路



腕力主義の大破産

今日の世界は、則ち、今日の諸制度は全然男が造つた制度であつて、其の中には女の考へや女の力は全く含められてありません。政治も外交も經濟も法律も其の他のあらゆる社會生活を動してゐるものも皆男の造つたもの、男子を中心に造つたものであります。皆、戰鬪的な利己的な男性の腕力が造つたものであります。そしてそれは皆男性中心主義の思想の結果であります。

一體、世界を動してゐる力は二つあります。其のうちの一つは今申ました腕力であつて、そして、これは物質力と云つてもよう御座いますし、又、現在と云つてもよう御座います。則ち、現實主義であります。そして、これが男性の力であります。そして、もう一つの方な愛情でありまして、これは無形なものであり、そして、未來であります。則ち、その目的は未來を創造するのであります。そして、これが勿論女性の力であります。

處が、今日迄、表面に、はゞをきかせて世の中を支配して來ましたものは男性の腕力、則ち、現實主義でありました。其のために女性の力、則ち、愛情は全く其の力を働かすことが出來ないでゐました。現在を殺しても未來を生かさうとする、つまり、自分の身を削いでも子供の幸福を計ろうとする其の力は全然無視されてゐたのであります。無視されない迄も、女々しいと云つて卑しめられてゐました。そして、それよりも猶重大な誤りは婦人の戀愛が男子の娯樂用として用ひられて居たことであります。

凡て、事業は其の出立の方法がよろしければ、もう、半分の成功だと云ふことを聞きますが、生命を創造する起原である戀愛が娯樂の道具として見られたり、未來を創造する愛情が卑しめられたりしてゐて、どうして、立派な人間を造ることが出來ませうか？ 人類の改造、引いて、社會の改造は、先づ、女の愛情を神聖なものとなし、其の愛情に最高な權威を持たせることによつて、始めて、始まります。さうすることによつて、人類の改造、則ち、世界の改造はもう半分出來たのであると云ふことを今私共婦人は男子に告げなければならないのであります。

多くの男は自分の娯樂の具とするために女の愛情を得やうとして、心にもないことを云つて女の觀心を買はふと致しますが、それに付いてエレンケイは云つて居ります。『いくらでも代りのある、單なる物質である貨幣の贋造が重罪であるのに、何故、生命の起源である愛の贋造が無罪であるか？』と。

さう云ふやうに愛の力を無視して、腕力則ち物質の力のみを跋扈させる結果は必ず腕力と腕力の衝突となり、やがて戰爭と云ふことになります。昨年迄續きました。あ

の世界大戰爭は、男性的腕力萬能主義の餘ます處なき大破產であります。

そして、あの大戰爭に刺戟されていろ〳〵な社會問題が起つて參りまして、何にもかもが改造されなければならない、世界の文明はもう一度出直さなければならないと云ふはめに今人類は陷つてゐるのでありますが、併し、出直すに附いては全然思想其のものが變らなければならないのであります。處が、其の思想の變つた形跡は今の處少しも見へてゐないのであります。

婦人問題にしろ、勞働問題にしろ、又、此の頃矢釜敷く論せられてゐる新マルサス主義にしろが、皆、あの大戰爭を釀造した腕力萬能主義、現實主義から一歩も出てゐないのであります。思想の改造を計ることなしに、そして、女性の力を仲間に入れることなしに此のまゝ進んで行つた處が何にも新しくなりは致しません。戰鬪的及腕力萬能主義な男の手に諸制度の設定を委ねて置いたならば、社會は矢張り今迄通りのものであるに相違ないのであります。

男の手に一切を委ねて置いたならば、いつ又戰爭と云ふ大慘劇が演じ出されるか分

らないのであります。併し、今日迄の思想が全然誤まつてゐたと云ふことを認めると同時に、女の創造的な柔い豊かな感情を社會の表面に漲すことによつて、云ひ直せば男性の自己滿足を標準とする精神の代りに、女性の自己犧牲の精神を以て社會制度を造ることによつて始めて平和な幸福な新しい世界が建設されるものであると云ふことを今私共婦人は大聲擧げて宣傳しなければならないのであります。戰爭と云ふ悲劇、人命財産をチリアクタのやうに取り扱ふ戰爭と云ふものを無くするために許りでも私共婦人の力が社會の表面に現はれなければならないのであります。

一皮むけばまだ人間は野蠻人

明治二十七八年の日清戰爭の時には私は殆んどまだ子供でありまして子供相應に戰爭熱に浮かされたのでありましたが、明治三十七八年の日露戰爭の時には、丁度、私は基督敎に熱中して居りまして、まるで、尼さん同樣な生活に滿足して居りまして、もう、世の中の罪惡には超越したような顏をして居りました。そして、戰爭などと云

ふ馬鹿氣た事は聞くたくもない見たくもないと云ふやうな風をしてゐました。尤も、日本に居りましたならそんな呑氣な態度はとりたいと思つてもとれるものではなかつたでありませうが、亞米利加の尼寺のような奥深い處に居つたものですから、さう云ふゲートーが出來たので御座います。そして、とう／＼日露戰爭の詳細は殆んど知らずに過してしまいました。そして、其の御目出度い、い丶氣持ちをいつ迄も續けて居りまして、もう人間は戰爭などをするやうな事はない。日露戰爭が世界に於ける戰爭の打ちきりであらうなどと獨りで定めてしまつてゐました。

處が、今回の戰爭の勃發を見て私のねぼけた頭は本當にびつくりしてしまいました。日露戰爭に戰爭らしい實感を持つてゐない私は戰爭とは昔の物語りのうちにのみあるものだと云ふように感じてゐたものですから、あの戰爭が事實となつて目の前に現れて來た時には本當に呆氣にとられてしまつたのであります。

そして、今日の人間は文明／＼と口では云つて、天晴れ文明人をもつて自ら任じて居ながら、一朝事があれば其の文明の着物をかなぐり捨てゝ直ぐに野蠻人になり得る

ものであると云ふことをつく〴〵考へさせられたのであります。たとへば、平生お腹がすいて居ない時には目の前に御馳走が積んであつても『まア、あなたからお先に』など云つてお互ひに譲り合つてお上品ぶつてゐても、併し、いよ〳〵お腹がすいた時には人の持つて居るものもふんだくつて自分が食べてしまうと云ふのが、まだ、今日の人の人間性であると云ふことをつく〴〵考へさせられたのであります。

そして、今日の此のキラビヤカな文化を所有してゐる人間が、どうして其のやうな劣等な性質を持つてゐるか？　なぜ、國民が汗を流して蓄積した富、又は、多くの母達が自分の身を削るように苦しい思ひをして大切に育てゝ來た青年を、むざ〳〵無駄にするような行動に人間は出るのであらうかと私は一生懸命考へて見ました。そして外部的には素晴しく發達した文明を所有してゐても今日の人間はまだ腕力萬能主義則ち野蠻狀態から脫してゐないのだと云ふことを發見したのであります。

戰爭は突發するものではありません。一人の天才が現れて參りまして、そして、其の非凡な才能を發表致しますと世間は驚きの目をみはります。恰も、其の天才が不意に天から降つて來たか、又は、地から生へてゝも來たかのやうに。けれども、其の天才が世間に名を知られるようになる迄には人の知らない非常な努力を長年の間續けてゐたのであると同樣に、今回の大戰爭及び、今日のこの混亂狀態は決して、不意に突發したものではなく、もう、長い間、こうならなければならないように人は有識のうちに、又は、無意識のうちに其の準備をしてゐたのであります。則ち、腕力萬能主義自己中心主義、現實主義を增長させてゐた結果があの大戰爭、今日のこの混亂狀態を出現させたのであります。

まるで、地球を抱へた大男のような力をもつて其の腕力主義が西洋を修羅の巷と化し、そして、我が國の思想界、勞働界、婦人界をも搖り動しました。そして、一體、其の腕力萬能主義は何處から生れて來たかと申ますと其の種は英國にあつたのでありますo則ち、十九世紀の中頃西洋文明に現れたダーウィン主義が其の種だつたのであ

ります。

一體、ダーウィンの發見した原則、則ち、自然陶太は實は生物界に付いて云はれたものでありまして、此の原則を社會に應用しようと致しますならば、それは道德的心理的進化の洗禮を受けた後でなければならないものでありますのに、それが生物界から直接に人間社會に應用されてしまつたのであります。則ち、强い者が當然生存する權利をもつて居て、弱い者は亡びなければならぬと云ふ、つまり、腕力又は財力の持主が自分に都合のいゝようにダーウィンの原則を解釋して、そして、一種の世界觀を造つてしまつたのであります。强い者が弱い者を負して權力又は金力を握るのは天が定めた原則だと云ふように强い人間に信じさせてしまつたのであります。そして、これが、今日世界を支配してゐる腕力萬能主義の誕生であつたのです。

ダーウィン主義が擴まつたのは一部の人間に都合がよかつたと云ふ處に力があつたので、純粹な學問として擴まつたのではないのであります。丁度、婦人問題が擴まつたのは、女性としての婦人の向上、人類の幸福を目標とするよりは、勿論、表面はさ

う云つてゐるのでありますが、實は婦人についてゐて離れない家事育兒の煩雜な仕事から多くの婦人が逃れたいと思ふ處に力があつたのと同じであります。

ダーウイン主義の軍國化

ダーウイン主義と云ふ種が英國の個人主義と云ふ畑に蒔かれた時に、それは、優生學と云ふ芽を出しました。けれども、其の種が獨逸の國家主義と云ふ畑に蒔かれた時には、そは軍國主義と云ふ芽を出しました。ダーウインの進化論の刺戟を受けたゴールトンは進化の法則によつて動植物が改良されるならば、人間も亦其の法則によつて改良されべきであると云つて優生學を主張したのでありますが、併し、これは人間の愛を全然無視してゐると云ふ弱點があります。一方、獨逸の國家主義と云ふ畑に蒔かれて芽を出した軍國主義は素晴らしい發育を遂げてしまいました。軍國として獨逸がどの位ひ强かつたかと云ふことは三ツ兒でも知つてゐる事實でありますが、ダーウイン主義と云ふ種がどうして、あんなに大きくなつたかと申ますとそれはヘッケルの書い

たものによつてだ、と云はれてゐます。ダーウィンの理論とヘッケルの思想とが學者及び、實行家に吸收されまして、そして、利用されたのであります。そして、ツイにダーウィン主義の曲解は獨逸帝國の國家政策、並びに、國際政策となつたのであります。

ヘッケルのダーウィンを解釋した處によりますと、人間は社會的動物であります。ですから、社會に對する義務も自分に對する義務も同じものであつて、利他主義、則ち他人の利益を計ることとは、唯、精練された利己主義、則ち、やつぱり、自分の善を計ることだと云ふのであります。これが、先づ、ヘッケルの一元主義の倫理の組織なのであります。ヘッケルがダーウィンを通俗化したものは彼の『宇宙の謎』と云ふ本の中に集中されてあります。ヘッケルの意見によりますと、『凡ての思想は一ッの根本概念のめぐりに集まつてゐるものだが、基督敎の倫理は二元論の一種であつて、自分と社會、或ひは自分の善と世界の善、或ひは、個人と宇宙と云ふように凡てを二ッに見てゐるから無意義である。ダーウィンの倫理說にはそんなものはない。』と云つてゐ

ます。ですから、基督教の『敵を愛せよ』だの『汝を呪ふものを幸せよ。』など云ふ言葉はヘッケルにとつては不自然であると同時に實行に於ても無用なものであつたのです。

そして、そう云ふヘッケルの說は其れを讀んだ何億の人の心に腕力主義をしつかりと植へつけてしまつたのであります。

獨逸が軍國主義に傾いて行つたに付いて、ニーチエはヘッケル以上に力があつたと云はれてゐますが、とにかく、獨逸國民はさう云ふやうな感化を受けて全く軍國主義者になつてしまいまして、國家の有効な使命は戰爭をすることであると云ふ信仰をもつてしまいました。そして、あの有名なトライチケなどは云づてゐます。『戰爭は正義で道德的である。永久平和の理想などは不正で不道德でおまけに不可能である。自分はもの心覺へてから社會に對する義務などと云ふことは一度も考へたことはない。併し、獨逸帝國と云ふことに付いては一日も忘れることは出來なかつた。』と。つまり、獨逸と云ふ國家を確實に打ち立てて置くためには社會はどんなに苦しん

でも他國がどんなに迷惑してもかまはないと云ふのであります。そして、彼は獨逸帝國の運命は劍を握つてゐるものゝ手のうちにあるなどゝ云つてゐるのであります。

獨逸の學校の敎員達はトラチケのやうにさう露骨に其の精神や目的を云ひ現しはしなかつたさうでありますが、併し、暗々裏に其の精神を生徒に吹き込んでゐたと云ふことであります。フローベルが幼稚園を始めて造つた精神も矢張り其處にあつたので實に獨逸は幼稚園から小學中學大學に至る迄、腕力萬能主義の人、軍國主義の人を造ることを使命としてゐたのであります。

其の結果、大戰爭が勃發するのは餘まりに當然な成り行きではありませんか。

ダーウイン主義が現れる以前にも、勿論、腕力金力萬能主義がありました。けれども、一方、宗敎の理想主義も可なり根強い勢力を持つてゐまして此の兩者の間には常に爭ひが絶へませんでした。腕力主義は他人を排して自分を高い位置に置かうと致しますし、宗敎主義は絶へず個人を低きに置かうとしてゐましたから。頭を擡げよう擡げようとしてゐる腕力主義は宗敎の力のために無理やりに押へつけられて居たのであ

ります。

處が、曲解されたダーウィンの優勝劣敗の原則が現れたゝめに、其の腕力主義が急に力を得て參りました。そして、半解のダーウィン主義に科學の名をつけて、そして、宗敎の力を除々と押しつけてしまいました。

西洋では基督敎會が理想主義の歷史的の中心でありました。長い間、西洋國民は最も逆境にある時でも常に目の前に一ッの理想を置いて、そして、其の理想の實現に努力してゐました。そして、文明は除々と熟して行き、其の結果は完全なる世界の平和が來るものと信じて居ました。

けれども、ダーウィン主義の出現、其の主義の半知半解が腕力萬能主義に非常な勢力を與へて、そして、其の理想主義を覆ふてしまつたのであります。歐州が基督敎を奉戴して以來も實際戰爭は止みませんでした。ですから、歐州の歷史とは實は人殺しの話計りであります。けれども、戰爭しながらも其の目的は平和を得ようとしてゐた

のでありました。

富國强兵則ち現實主義が世界各國の理想となつた

處が、此の五十年間に則ちダーウィン主義が現れてからは、かすかにあつた其の理想ですらも無くなつてしまつたのであります。平和は宗敎の力などをかりなくても腕力で得られるものだと云ふように考へられて來たのであります。そして、其の結果、歐洲文明は武裝の文明になつてしまつたのであります。一切の社會制度が富國强兵と云ふことを目的とするようになつてしまつたのであります。産業も政治も敎育も一切武裝の準備をするに過ぎないと云ふように傾いて來たのであります。此の二十世紀になつてからも、書物に於て、新聞紙に於て、國會に於て、學校に於てゝすから、戰爭が重もなる問題となつてしまつたのであります。學者も法律家も戰爭に付いて論じ、

戰爭に關する事柄を取り扱ひ、つまり、どうすれば戰爭に勝てるかと云ふことが重なる問題となつてしまつたのであります。

そして、此の傾向が直ち世界をつゝんでしまいました。英國や、殊に、米國などは以前は戰爭と云ふことには鈍感であつたと云はれてゐたのでありますが、今は、全く戰爭に關する思想によつて深い變化を受けてゐるのであります。そして、眞の文明は戰爭を通じて來るなどと云ふ言葉や、戰爭は人間の自然の狀態であると云ふような言葉や、戰爭は必要であると云ふような言葉が流行するようになりまして、そして、現代の科學は戰爭を絶滅するものではなく、むしろ、戰爭をより有効に破壞的にするものだなどゝ云はれるようになりました。

墮落した平和論

五十年以前には戰爭は罪惡でありました。則ち、文明の原則にそむく罪惡でありました。一個人が罪惡から超越しなければならないように國民も戰爭と云ふ罪惡に超越

しなければならないと敎へられたものでありました。けれども、近頃になつてからさう云ふ氣分は全く薄いでしまつたのであります。

尤も、近頃になつてからも平和論がある事はありました。けれども、それは以前のやうに宗敎から來た平和論ではなく、戰爭をしては損だと云ふ、つまり、經濟上の損得から來た平和論でありました。これは全く墮落した、理智からのみ來た平和論でありますから、感情から來た腕力主義には到底かなうものではありません。

さう云ふやうに西洋人の思想と行爲はダーウインの自然陶汰說が現れてから、ズン〳〵墮落して行つたのであります。そして、それが、國際關係に於て最も著しく現れて參りまして、國際關係は正義人道と云ふことを基礎にするのではなく、唯、單なる利益の交換と云ふことになりました。英國の最も勢力のある新聞が次のやうなことを云つたことがあります。

『最高な文化のうちにある歐州の文明も此の頃は野蠻狀態に歸つてしまつた。目的が粗雜になり、ものゝ仕方が冒險的になり、そして、方法が如何にも野蠻的であるが、

ます。殊に外交に付いて其れが著しい。』と、そして、外交官に付いては次のやうに云つてゐ

『今日の外交家はお互ひにあやつりを仕事としてゐる。密かに出兵をしたり、必ず失敗する計畫を立てゝ見たり、分りきつてゐる出來事を見失つて混雜に陷つたり、そして、お互ひに國民の愛國心を主義も何にもない戰端の犧牲に供してゐる。』と。

誤まつた人生觀があらゆる不幸のもと

正義人道を目標とするのでもなく、國民の幸福を標準にするのでもなく、唯、あやつりを仕事としてゐる外交家の其のあやのつり損ねの結果、國民の生命と富が無駄に費されると云ふことは國民にとつては殊に婦人にとつては何とも我慢の出來ないことであります。戰爭の費用は私が此處に云ふ迄もなく、國庫から計り出るものではなく、實に人類の倉庫から莫大なる生命を支出しなければならないものであります。そして其の生命が支出され無駄に費されるに付いて、どの位ひの涙が、殊に、婦人の血の涙

が流されることでありませう。

私は自分の心の本當の要求に從ひますなら田舍にひッこんで土でもいぢつて靜かに暮したいのでありますが、併し、今日の此の混亂した不幸に泣いて居る人、殊に虐たげられ、押へつけられて悲慘な日を送つてゐる多くの婦人達を見ます時には、又、妙に血が踊つてとてもひつこんではゐられないような氣持ちになります。私が出て騷いだ處が、それが、いくらかの役に立つかどうかは今の處まだ疑問でありますが、もし自分のする仕事が全く無用なものであると云ふことの認めがつきますならば、私は其の瞬間にひつこんでしまいます。筆も納めてしまいます。けれども、此の不省なものでも何にかの役に立つと云ふことの自信がある間は何處迄も突き進んで行く考へで居ります。

誤まつた外交、下手な國策のために國民が罪なくして苦しんで居るのは實際であります。處で、一方に勞働者を指導する人達は今日の國民の此の苦しみを全然資本家の責任に歸してゐます。資本家の横暴が勞働者を苦しめ、そして、政府は其の資本家の

手先きに使はれて居るのだと申ます。それが凡ての不幸のもとだと申ます。成程勞働者を苦しめる資本家もあります。政府が資本家に都合のよい政策をとる事もありませう。けれども、今日の此の狀態を造り出したものが全然政府の又は資本家の責であると云ふのも妥當でないと私は考へます。

勞働者が苦しむのも、婦人が泣かされるのも、資本家が橫暴を極むるのも、政府が下手な國策をたてるのも、何にもかもが、淺薄な人間性の理解と、不完全な學理によつて造り上げられた國民全體の誤まつた人生觀から來てゐるものだと私は考へます。そして、其の誤まつた人生觀のよつて起つて來た源は半知半解のダーウイン主義にあるのです。

腕力萬能主義哲學の歸着點

西洋では勞働者が、しつかりと、そして、有識に、民主々義の形式の下に最上權を握り始めました。一言で申ますならば、勞働者の首領は、政治上の首領が何十年かゝ

つて造り上げた位置を一躍して得てしまいました。そして、これは勞働者が政治的に目ざめて來た結果でありますが、併し、これも亦腕力萬能主義を決して脱して居りません。腕力萬能主義の資本家から、同じ腕力萬能主義の勞働者が、腕力をもつて權利を奪つたのに過ぎないものであります。

政治家や、外交家や、又は經濟學者が採用した所謂曲解されたダーウイン主義が此處にも其のまゝ現れてゐるのであります。そして、彼等は申ます。『戰爭が正當なものであつて、これが文明を建設するものであるならばストライキ程正當な戰爭はない。從つて、ストライキ程文明に貢献するものはない。そして、戰爭が最も有效に戰はれるためには最も完全な組織を要すると同じように、勞働者も有效に戰ふためには組織を要する。そして、戰爭の組織には徵兵令が必要であるように、勞働組織を完全にするためには壓制的に勞働者を仲間にひき入れる必要がある。』と云ふのであります。

ハロルド・ベグビーと云ふ人は次のやうに云つてゐます。

『自分の生活は自分のために存在してゐるので、人のために存在してゐるのではない。

何億萬年の過去は自身と云ふ一個の人間を造るために働いて來たのだ。無限な時間のうちのたつた一瞬間則ち私の一生は全然私のものなのだ。私の喜びのために私の思ふ通りに此の一生を費すのだ。私の欲しいと思ふものは何でもかでも私自身に取り入れなければならない。それを邪魔するものは誰でもかまはない私は排斥する。私は私の權利を持たなければならないのだ。未來などに付いて考へる必要は少しもない。未來に生きる私の子孫は土に歸つた私の體を踏みつけるだらう。私を踏み付けにする未來の人間などのために考へてやる必要が何處にある。』

先づ腕力萬能主義の哲學の歸着する點はこれであります。そして、これは前にも幾度も申ましたダーウイン主義の誤解から來てゐるものでありますが、もし、國民全體が此のベグビーのような現實主義者になつたならば國家の未來、人類の未來はどうなるのでありませう。これが則ち腕力萬能主義、自己中心主義、現實主義の結果であつて、そして、それはダーウイン主義の曲解から來たものであります。

實に、西洋の凡ての特長ある科學は腕力の組織的智識であつたのであります。そし

て、今日の勞働問題を解決しようとする思想も前にも申ました通り、矢張り、其の腕力を組織しようとするのに過ぎないものであります。

輸入された西洋思想は實に有力なものであります。それによつて我共が啓發された處も決して少なくはありません。けれども、其の出所を探つて見ますならば以上お話して來たようなもので御座います。私共が全然此の思想に賴つて居りますならば、到底、萬人が希望して居りますような平和な美しい社會が造られる筈がないのでありま す。

ですから、私は、歐米の婦人がこう云ふ事をした、歐米の勞働者の位置はこうなつたと、まるで、私共日本人は何でもかでも歐米にならはなければならないように、先覺者と稱ばれる人々が叫ぶのを聞いて苦々しく思つて居ります。

女性文明の誕生

愛情に生きるのが其の本性である婦人は決して以上御話し致しましたような思想に

なづむことは出來ないのであります。又、なづんではならないのであります。私共婦人は、愛情に生きようとする婦人の性情が國家の力、人類の生命であると云ふことを今悟らなければなりません。今迄、婦人の其の性情が卑しめられ、婦人の力が壓迫されてゐたゝめに、男性の腕力萬能主義が何處迄も手を伸して、そして、今日の此の混亂狀態が現出したのであります。ですから、今日の此の狀態を救濟するには、婦人の愛の力を社會の表面にみなぎらして、そして、極端な腕力萬能な現實主義の勢力を挫じかなければならないのであります。そして、現實のために虐げられようとする未來を則ち、子供を保護しなければならないのであります。

實を申ますと、今の處、一般の婦人は國家的の事、及び、世界的の事には餘り興味をもつて居りませんが、併し、婦人が立つことによつて、戰爭と云ふような馬鹿らしい、自分の愛する子息や夫の生命を奪はうとするものが無くなると云ふ處に氣が付くならば一般の婦人達も必ずふるい立つて來るであらうと私は信じて居ります。

今回の大戰爭に於て歐米の婦人は隨分目ざましい働きを致しました。けれども、あ

の戰爭を引き起したものは全然男子であり、そして、直接戰つたものも矢張り男子であつて、婦人は唯男子のお手傳ひであつたのです。婦人は戰爭に贊成したのでもなく、心から其の氣分になづんで戰爭にたづさはつたのでもなく、唯、男子の意向に從つて事情止むを得ず働いてゐたに過ぎません。そして、途方もない大破壞に呆れかへつた婦人は、これからの仕事、則ち、平和を確立する仕事は女の衷心からあふれ出て來る愛情の力によらなければならないものであると云ふことをつく〴〵感じたのであります。

　四海同胞主義と云ふことは腕力を誇りたい自己中心主義の男子には空想であるように思へるかも知れませんが、併し、小さな生命が胎内にやどつた其の瞬間から生れる迄苦しんだ母、生れてから一人前になる迄明け暮れ苦心に苦心を重ねて子供を育てゝゐた母には此の四海同胞主義と云ふことは本當に切實な衷心からの要求であります。

　生れてから一人前になる迄その精神にも肉體にも針の先き程のキズもつけてはならないと思つて明け暮れ苦心を重ねて育てた、其の子供に戰爭をさせたくないと云ふ全國の母の願ひが凝つて始めて戰爭と云ふものは絶滅し得るものであると私は考へて居

ります。もし、婦人でありながら、母としての經驗を持ちながら、人の子が彈丸の的になつて血まみれになつてバタ〳〵倒れるのを見ても何の考へも起らないならば、それこそ、人としての價値のないもの、婦人としての價値は猶更ないものであります。新時代の婦人は婦人特有の其の情緒に最大なる威嚴を持たせて、そして、其の情緒の滿足を得るために努力するものであります。新婦人の使命はさう云ふ處にあるのであります。婦人の經濟上の獨立や、婦人參政權の獲得は其の使命を果すに付いての、唯、一部分の仕事に過ぎないのであります。愛情の價値を社會に認めさせ、愛情に權威をもたせるようにするのが最も重大なる仕事であります。

現在を維持しようとする男性の現實主義、則ち、物質の力も要用なものには相違ありませんが、併し、未來を創造しようとする女性の愛情を基礎とした、理想主義の力の活躍がなかつたならば人類進步の軌道の上を私共はまつすぐに進んで行く事は出來ないのであります。

前にも申ました通り、女の理想主義は男子の現實主義のために卑しめられ、そして、

壓迫されて居たのでありますが、併し、女は其の力を充分に外部へ發揮することが出來なかつたために、其の力を內部にジーッと蓄へて來ました。そして、男が自由自在に外部に向つて發展して行つてゐる間に、つまり、男が極端に專問的に走つて行つて、人生と云ふことに付いて殆んど忘れようとしてゐる間に、女は長年の間內部に蓄へてゐた力をもつて人生と云ふことをしつかりと見つめてゐました。そして、女は今人として誤まらない道を發見して、そして、女性獨特の豊かな愛情に最大なる權威をもたせて、男性文明の失敗の後かたづけをしようとしてゐます。そして、新文明を建設しようとしてゐるのであります。長年の間、內部にジーッと蓄へてゐた其の力を充分に外部へ發揮しなければならない時が、今、女性のために到着したのであります。

未來のために現在を犧牲とする奉仕の精神が絕對に必要な時に私共は今到着したのであります。新文明が生れるか、生れないかの境は一ッにかゝつて女性の此の力を活躍させるか、させないかによつて定まる問題であると私は信じて居ります。

一部の婦人は本當に女性としての其の使命に自覺して、そして、女性の力を活躍させる準備を着々と進めて居ります。

けれども、多くの所謂目ざめたと云ひ、自覺したと云ふ婦人は本當に女性として目ざめたのではなく、唯、單に、因習を破つて、そして、男の模倣をしようとして居るのに過ぎません。唯、單に男の腕力を模倣して得意の鼻を高くしようとして居ります。そして、男子の無學は此の種類の婦人を新婦人として歡迎して、本當に女性として目ざめた貴い婦人の價値を見ることが出來ません。

併し、今日迄の文明が全然失敗であつたことを見ることの出來る男子は、決して、婦人の男性化を喜ぶものではなく、婦人の女性としての自覺、社會奉仕の精神の價値を悟るであらうと思ひます。

今、新らたに生れ出た、則ち、今やうやく表面に現れて來ました女性獨特の力の價値を男子側が認めて尊敬もし、其の活躍にじやまを與へないことによつて、平和な美しい新文明は、忽ち、建設されるでありませうが、もし、男子側が猶頑迷にも女の其の力を押へつけて腕力を振はうとするならば、これからの婦人は男子に對してますます反感の度を高めて行きまして、今後、猶久しく男女間の不調和は止まないであらうと思ひます。かすかながらも、今、女性文明は呱々の聲を擧げて居るのであります。

（越後タイムス社講演）



産兒制限の倫理的批判

(1)

産兒制限、則ち、ブォーイスコンツロールに附いては先月慶應大學でお話し致しまして云ひたい處は大抵云ひまして、そして、又、それを『本誌』十一月號に載せて置きましたから、何にか、戀愛の問題に付いてゞもお話して見たいと思つたので御座いますが、何でもかでも此の産兒制限に付いて話せとの御言葉で御座いましたから、又々、此の問題を取り上げたので御座いますが、實は私は此の産兒制限と云ふことは唯思ひ浮べるだけでさへ不愉快であります。なぜなら、これは餘まりに人間の精神的方面を無視して、人間の動物的方面計りを取り扱つてゐるものであります。つまり、まだ人間が動物の範圍を脱してゐないものとしての議論でありますから、此のことに付いて云々されて居るのを聞きますと私は、人間が侮辱されてゐるように感じま

す。

ですから、勿論、此の問題を自分で取り扱ふのは全然好まないのですけれども併し、始終、何のかのと筆を通してものを云つてゐるもの丶義務、云ひかへればふだんおしやべりをしてゐる罰だと觀念しまして先月此の問題を取り扱ひました處が、其の罰をもう一度課せられまして、今、又それに付いてお話し至さなければなりません。

(2)

マルサスの人口論は私が此處でわざわざ申上げる迄もなく皆様がとうに御存じでゐらッしやいますけれども、お話の順序として一言申上げます。人口は一二四八十六と幾何學的に殖へて行くのに反して、人間に必要な食物は一二三四五六と算術的にしか殖へて行かないから、もし、人間が子供を生むことを制限しなければ必ず戰爭とか、流行病とか、或ひは又、饑饉とか云ふものによつて自然が人間の數を制限すると云ふ議論を今より百年以前にマルサスが公に至しました。

其の後、世の中はだん〳〵複雜になつて參りまして不幸や罪惡がだん〳〵、殖へて參りまして、いろ〳〵なやかましい社會問題が起つて來ましたに付いて、マルサスの人口論は非常に力强いものになつて參りました。そして、マルサスの其の説が徹頭徹尾眞理であると至しましてそれであるから、人は子供の數を制限しなければならない、避姙法を應用して子供を生まない工夫をしなければならないと云やうになつたのであります。これが

所謂プォイスコンツロール、則ち、新マルサス主義で御座います。

處で、此の産兒制限、則ち、新マルサス主義は、マルサスの人口論を徹頭徹尾眞理であると致しまして、其の上に立てた議論でありますが、併し、マルサスの人口論は實は未だ、動かすことの出來なく眞理であると證明されたわけではありません。

且ッ又、マルサスがあの有名な人口論を公に致しました時分に、マルサスは人間の智力が食物の増大を計り得ることを考へてゐなかつたように私は考へます。云ひかへれば、マルサスはマルサスの時代から百年を過ぎた今日、此のように機械産業が發達するとは考へてゐなかつたろうと思ひます。

前にも申ました通り、マルサスは、人口は一、二、四、八、十六、と云ふように殖へて行くのに食物は一二三四五六と云ふようにしか殖へて行かないと云ふのでありますけれども、併し、亞米利加のホーランダー氏の統計によりますと亞米利加の人口は

一八五〇年　　二三、一九一、八七六

一九〇〇年　　七五、九九四、五七五

五年間に則ち二百二十六パーセント、二倍と二割六分の増化であります。處で諸穀物の増加はと見ると

一八五〇年　一億七千四百二十萬石

一九〇〇年　八億八千六百八十萬石

であります。則ち、四百〇九パーセント

四倍と九分增加してゐるのであります。
そして、他の產物も其の割合ひで殖へて居りますので、此富を金額で申ますと、一人あてが
一八五〇年　三百八弗
一九一二年　一千八百三十六弗
になつてゐます。

(3)

これによつて見ましてもマルサスの人口論はもう覆へされてゐるのでありま
す。此の人口論が覆へされるならば此の人口論の上に載かつてゐる新マルサス主義も矢張り立たないのであります。
それにも拘らず此の新マルサス主義が大流行であるのは本當に可笑しなことであります。我が國の學者計りでなく西洋の學者も十人のうち九人迄は矢張り此の說を肯定して居ります。
一體、避姙法の實行はマルサスの人口論とは無關係に歐州に於ては十八世紀の頃から行はれてゐたと云ふことでありま
す。そして、それは上流階級の人々が不道德な行爲をする場合ひに應用してゐたものであつたそうであります。けれども前にも申上げました通り、此の頃になつてからは第一には貧乏問題から、それから、結婚問題から、又、婦人問題からもいろ〳〵な理由が附加されまして、そして、新マルサス主義と云ふ名が付けられまして、此の避姙に道德的價値があるように云はれるようになつたのでありま
す。そして、ズン〳〵世界の文明國に擴がつて行つたのであります。
そして、進化論からの產見制限肯定の

理由は、『人間は進歩すれば進歩する程生む子供の數が減つて來てゐる。そして、人間の數が減るならば、弱いものが少なくなり、從つて、强いものが生存し得る機會も多くなる。であるから、産兒制限と云ふことは進化の過程に於て當然來るべきものではあるが、併し、今日迄にはそれが無意識に行はれてゐたのを、これからは有識に、不任意であつたものを任意にするに過ぎない』と申ます。

けれども、進化論からの新マルサス主義肯定の理由は旣でに其の肯定の理由が非定の理由となつて居ります。なぜなら人間の進歩の結果は子供の數が累進的に減つてゐると云ふことを進化論自身が旣でに證明して居ります。ですから、人工をほどこして子供の數を制限せずとも、人間が進歩すれば自然に子供は少なくなるのでありますから、わざ〱新マルサス主義の實行など持ち出さなくとも、人間を進歩させる方法を考へればよろしいのであります。

(4)

新マルサス主義の實行に最も强い理由を與へたものは優生學であります。(以下十一月號にほゞ書いてあるので略します)

(5)

社會改良、則ち、人道主義からの新マルサス主義實行の主張はいくらか理由があるようではありますが、併し、これに對しても私は反對する理由を持つて居ります。貧乏人の子澤山と云ふたとへのある通り、何處の國でも貧乏人には子供が

澤山あります。そして、子供を澤山持つてゐる貧乏人は大抵は智力の低いものであります。勿論、例外はあります。精選された感情、高い智識の持主でも子供を澤山持つ人がありますが、先づ、一般には智力の低いものが子供を澤山持ちます。

そして、其の理由は智力の低いもの程男女關係に計り人生の享樂を集中するからであろうと思ひます。下級の人になる程どうかこうか食べることが出來さへすれば、すぐ、結婚してしまいます。これに反して進歩した人達はより高い智識を吸收するために、又は、高尚な職業上の熟練を得るために其の方に精力をとられますし、從つて、結婚は後れます。ですから、無智な人間に新マルサス主義の實行を奬勵して性慾の亂用をさせるよりも彼等を智力的な人間にするために彼等を教育する方に努力するがよろしいのです。

人間の質をよくするために子供の數を制限するのだ云ひますけれど、果物などならばギッシリ實がなつてゐるよりもパラッとなつてゐた方が大きくなりますけれども、パンのみにて生きるものでない人間の親が下等な人物であるならば、五人あるべき子供が二人になつた處が、決して、子供が優良になるものではありません。要は下級の人がもつと智力的になり、高尚な戀愛觀を持つようになればよろしいのです。

もし、一人か二人の子供ならば裕に養育出來るが五人六人になつては收入が足りないのだと云ふならば、新マルサス主

義をどうのこうのと云つてゐるひまに實銀制度の改革の方に力を至すべきであります。

新マルサス主義が、もし、一般に行はれるようになれば國家の未來がどうなるかと云ふ處にもし當局者が氣づくならば當局者は無産階級の人々がさう云ふことに思ひ至らない先きに彼等の生活をして餘裕あらしむるような施設をしなければならないのであります。

(6)

いづれにしろ、新マルサス主義實行の主張は、自然の衝動に、つまり、本能の力に最高な權威を持たせて、人間の人格を築くに付いては、本能を敎育することが如何に大切なものであるかと云ふ處に少しも氣付かないのであります。本能の敎育が進歩の基礎になるのだと云ふ處に氣付かないで、本能の跋扈を肯定しようとするものであります。本能には滿足を與へて、そして、其の結果の責任は負ひたくないと云ふのが此の新マルサス主義の主張の骨子になつてゐるのであります。つまり、本能には何等の敎育も與へず、抑制する術も敎へず、ほんほうなる活やくを許して、そして、其の結果である子供を生むまい育てまいとするものであります。つまり、權利だけを主張して義務を免れようとするものであります。其の態度が實に醜悪であります。そして、其の醜悪な態度はそれを持つてゐる人のあらゆる方面に打つて出ずには居ません。

のみならず、私は、人間の本能は敎育し得るものであると云ふことを信じま

す。たとへば、貧乏したくない、つまり、ひもじい思ひをしたくないと云ふ人間の食慾と、淋しい生活をしたくない、つまり、愛し愛されつゝ日を送りたいと云ふ愛慾とは大きな力で、世の中は此の二つの慾の力によつて動かされて居るのでありますが、併し、それ等の慾は命あつての慾で、生きてゐたい殺されたくないと云ふ生存慾は、それ等の二つの慾よりも大きくとも、決して、小さくないのでありますが、其の大きな強い生存慾ですらも教育の仕方によつては人は拾てます。つまり、愛國心、又は、忠義心の鼓吹によつて國民は君のために、又は、國のために喜んで其の生存慾を拾てて來たではありませんか？　して見たならば、性慾はどんなに力強いと云つても生存慾よりも小さいものですから、これは充分教育出來るものでなければなりません。そして抑制する習慣をつけられるものでなければなりません。幼少の頃から、いざと云ふ場合には命を捨てるやうに教へられた武士が、時が來れば見事に生存慾を捨てたと同じように、性慾も教育し得るものであることを私は信じます。又、さうすることによつて此の人生がどんなに美しいものになるか知れません。

昔の人間に比較すると、今の人間の精力は非常に衰へてゐると或る學者は申ます。そして、其の精力の衰へた原因は性慾の亂用にあると申ます。ドンドン子供が出來て其の仕末にさへ困る程であつても性慾が亂用されますのに、もし其の子供の出來るうるへがない新マルサス主義

が實行されますならば、其の結果の性慾の亂用はどんなものになるでせう。ですから、子供の數の問題よりも性慾の亂用と云ふことの方が個人並びに社會にとつて重大であるのです。

進歩とは困難に打ち勝つことであります。凡ての現代の思想の中で最大なる思想は人は凡ての困難と凡ての危險から脫することが出來るものであり、そして、其の手段は科學的智識を持つた愛であると云ふことであります。

困難に打ち勝たうとする精神が進歩の過程となり、幸福のもとゝなり、國家の基礎となります。ですから、子供を人工的に制限しようとすることは、人口が少なくなると云ふことよりも、自分の行爲の結果の責任を負ふまいとする考へ其れ自身が既でに有害であります。其の精神が既でに退歩的であるのです。

(7)

一つの團體の目的は其の團體に屬してゐる個人の利益を計るものであります。けれども、その個人が利益を得るためには、其の個人は先づ差し當り自分の幸福を犧牲に供さなければなりません。國家も一つの團體であります。故に、國家も矢張り個人の利益を增進するのが其の目的であります。けれども、國民は自分の利益を保護して貰ふために一時の犧牲を拂はなければなりません。ですから、國家の利益と國民全體の利益と衝突する場合はない筈でありますが、併し、實際には折り〳〵ありますが、これはどちらかゞ間違つてゐるのであります。國家の主

張が間違つてゐるか、個人の要求が間違つてゐるかどちらかであります。其の間違つた處は何處迄も明らかにする必要がありますが、とにかく、國家にしろ、個人にしろ、未來の幸福のために、人類社會の幸福のために現在は困難であつても出來るだけ多くの子供を出來るだけ優良に養育しなければならないと云ふ義務をもつて居ります。そして、その義務を果すことが國家の基礎、人類の幸福の根源であります。そして、そうするに付いては、勿論、犧牲が必要でありますが、此の犧牲が道德と稱せられるものであります。自分の利益以上に權利の標準を延長し得ないのは野蠻人であります。國家にしても自分の國の利益以外に利益の標準を延長し得ないのは矢張り野蠻國であります。ですから、眞の道德的な人間と云ふのは他人の利益のために犧牲を拂ひ得る、そして、自分の本能の力を制裁し得る人であります。

　道德の對しようである良心は動物のうちには存在しませんが、人間に於ては、それが自分の行爲を制裁する最大力であります。此の道德的觀念は社會的遺傳であるか、或ひは、又、親からの遺傳によつて人間の組織のうちの一部になつてゐるものであるか、これに付いてはいろいろな說があつて議論が一致して居ませんが、とにかく、これは、社會的遺傳と個人的遺傳と兩方から來てゐるもの丶ように思はれます。

　いづれにしろ、人間は倫理的の性質をもつてゐるものであります。此の性質は

除々と變化を受けて來たものでありまして、そして、自分の利益を犧牲に供すると云ふことであります。自分の利益を犧牲に供すると云ふことが人間にあるので人間と動物の區別があるのであります。そして、これが文明の基礎を造るものであります。

其處で、犧牲の念に反するものは不道德であると云ひ得るものでありまして、そして、新マルサス主義の實行は全然其の犧牲の念に反するものであります。自己滿足のために未來を無視しようとするものであります。未來のために現在を犧牲に供する國民は、現在のために未來を犧牲に供する國民よりも優良であることは歷史の證明する處であります。

ブォースコンツロール、則ち、新マルサス主義の實行は本能の活躍、則ち、現在の滿足を得るために未來の利益を無視するものでありますから、これは全然不道德であると云ひ得るのであります。

要するは一般人が健全な人生觀を持てば新マルサス主義など云ふことは自然消滅してしまうものであります。そして、其の健全なる人生觀とは各人が、戀愛は神聖である事、夫婦の愛は社會の基礎である事、親子の愛は生命であること、勞働は必要缺くべからざるものであること修養は日々の食物と同樣に必要なものであることを悟ることであります。

そして、青年達が先づ第一に知らねばならぬことは、戀愛を神聖視しなければならぬと云ふことであります。

（オーロラ協會講演）

ミル著『婦人の服從』の梗概

第二章

不平等なる結婚法と其惡結果

1

結婚は社會が女の爲に指定した運命であるが故に、出來る丈け婦人の心が結婚と云ふ事に惹き付けられるやうに工夫されてあると人は想像するかも知れない。併し社會は嫌惡すべき方法に依て其目的を達したのである。以前は女は腕力に依て捕獲されるか或ひは父から賣られて行つたものであつた。敎會が婦人の正式な承諾を要求した事は事實であるが、併し、若し父の意に反して娘が結婚を抗まうとするならば、娘は尼になる事に依つての外は其れを拒む事は不可能であつた。昔は男は妻の生死の權を持つて居た。英國の昔の法律に從へば夫は殿樣であつて、若し妻が夫を殺害するならば其は國事犯であつた、そして其の刑罰は火刑であつた。今日に至る迄妻は法律上及び實

際上夫の奴隷である。妻は夫の爲以外には財産を得る事が出來ない。妻の相續財產は夫の物になる。けれども、財產家の妻は讓り渡しによつて自分の財產を持つて夫の絕對管理から逃れる事は出來る、併し斯樣なる場合に於てすら妻は財產權に於ては夫と平等ではない。夫婦は法律上一人である、併し乍ら妻の第三者に對する行爲に關して夫を責任者となすの外は夫の不利益となるものはない。實際女は奴隷よりもよりよく取り扱はれて居る場合もある。併し如何なる奴隷も四六時中奴隷ではない。クリスト教國に於ては女の奴隷は其の主人に身を任かす事を拒む權利をもつて居た。けれども、妻は其の權利をもつてゐない。如何に殘酷な方法を用ひてでも夫は妻の意志に反して妻を動物的作用の道具と視る事が出來る。子供に關しては、法律上子供は夫のものである。妻が夫から去るとすれば彼女は子供を連れて行く事は勿論出來ないし、彼女に屬する何物も持ち去る事は出來ない。又、夫は妻をして無理に止まらしむる事も出來る。法律上の離婚のみが夫と分離して生活するの權利を妻に與へるのである。奴役の外は如何なるものも許されて居らぬ人間にとつての唯一の慰撫は其の奴役の自由選擇である。けれども、英國に於ては姦通と云ふことが附け加へられない限りは如何に非道の行爲が重なるとも妻に離婚の權利を與へないのである。

2

婦人は法律上の位置よりは實際上よりよき取扱ひを受けてゐる。婦人の復從の

狀態は男子の感情と男子自身の利害關係に依て其の度が減らされて居る。併しながら、家庭內の壓制主義は政治上の專制主義と同じである。もし、夫に對する妻の烈しい愛情が數へ上げられるならば其點は奴隷にしても同じである。實に生死の權を握つてゐながら、其の權利を行はずにゐると云ふことが絕大なる恩惠となつてゐるのである。

3

妻の愛情から來た服從や夫の度量ある勘忍を例とするのは正當な議論でない。何となれば結婚制度は一般的であるから惡い夫の場合に於ても、都合よく運用されべきものでなければならない。男子は絕對權を行ふべき彼等の資格を證據立てる事が結婚の前提として要求されない。あらゆる種類の人間が自分等に或る婦人を結び付ける、そして其婦人に對しては殺害以外には法律上の罪科に就ては何等の憂もなく如何なる殘酷な行爲でもなす事が出來る。男子は他人に對する關係に於ては正しくても妻に對しては亂暴な恣にする。何となれば妻のみは夫の殘酷に反對なし得ないからである。卑劣な男は法律を利用して妻に對して我慢と云ふ事をしない。彼等は妻と云ふものは男が自由に用ゆる爲に法律が男に與へたものだと思ふて居る。法律は近頃夫等の極端な亂暴を抑制する爲にいくらかの企てをしたには相違ない。併し夫の妻に對する虐待が度び重さねられし事が立證される迄は妻は離婚の權利がない。

4

多數の男子は野獸同樣である故にさう云ふ男子との結婚から來る人間の不幸は恐ろしいものである。野獸のやうでない夫も澤山ある、が人間らしい行ひを見せる人達は少ない。他の事柄に關しては道德的で平和であるが法律上己れに屬する妻を苦しめる夫の多いことも亦事實である。一體人間性と云ふものは絕對權を正當に制限して使ふ事ができない。その結果として夫が妻を支配する權利は寧ろ氣儘を許す法律となつたのである。結婚に於て男女平等となれば勿論男の惡癖は許されまい。今ですら氣早の我意を張る婦人は男に復讐して居る事は事實である。併し高尚な心を持つた婦人は自分達が用ゐてもよい即ち夫を責むる權利を持つて居てもそれを用ゐない。が、妻の不從順が夫の亂暴に對する唯一の方法である。斯くして夫の壓制の犧牲たる事から幾分か逃れる事が出來る。

5

夫の權力の惡結果を實際に矯めるものは所謂女らしい諂ひを用ひる事ではない。自然に生れた愛、共通の利益、日々の愉快さに對する妻の重要さ、夫が妻を自己と同視する事、而して絕えず接近して居る事に依て妻が夫を感化し得るのである。斯ふ言ふ手段に依て妻は過度な而して有害な感化力を持つ場合があるかも知れない。併し乍ら夫を感化する力を持つた處が人としての自由を失つたそれが報酬にはならない。最も優しい夫はしば〳〵妻の感化力に依て惡化される。何となれば妻は自分の理解せぬ方面に迄其の

感化力を行ひ得るから。

6

一人の人が一家族の頭であらねばならぬと論ずるものもある。

7

併し多くの商業上の仲間は頭を持たぬ。而して又其の必要を見出さぬ。權力の理論上の不平等は商業上の仲間に於ては望ましいものではない。況んや結婚に於てをやである。

8

判斷を要する事柄に於ては一人の人が全權をもたねばならぬ事がしば〳〵あるが之れは何時も一人でなければならぬと云ふことはないのである。先づ兩者の承諾に依て權利を區分しなければならない。資格に依て其區分を決定しなければならない。結婚が全く過りであつた場合にのみ困難が起る。

9

少なくとも年齢の差が重要でなくなる迄は、夫が妻よりも年長者であると云ふ事實がより大なる權力を夫に與へる。經濟上の負擔をもつ者が夫であれ妻であれ其理由で勢力を得る事になる。知力上の優勝も又大いに與かつて力がある。けれども夫が自分で讓歩し得るものを自分勝手に讓歩せずともよいと云ふ法律がこの場合を一層困難にする。

10

妻は讓るべく餘儀なくされない限り、如何なるものに於ても決して讓歩せぬものだと論ずるものがある。併し、今は女は男よりも一層犧牲となつて居る。彼等

は確かに斯くすべく敎へられて居る。併し彼等が平等の横利をもつ時は彼等の性質は反對となるであらう。而して男子が持權階級でなくなつた時に男子はより多くの犧牲をなすやうになるであらう。

11

或る婦人は單なる權利の平等を以て滿足せぬであらうと云ふ事は認める、又、現今の法律はそれを奬勵する。そして、女に權利を許さないならば、女は女が得べく工夫し能ふ物に對して權利を獲得するだらうと云つてゐる。

12

法律上の平等は夫婦に對する唯一の正しい關係である事の外に、其れは家庭を道德的なる修養の學校となす唯一の手段である。只平等なる人間の間にのみ道德的感情は敎えられる。吾々は服從の道德と武士的道德とを持つてゐた。併し今は正義の道德をもつ時が來て居る。ローマの文明とクリスト敎は、單なる人間としての要求は性、階級及び位置に對する要求の上に位ひするものであると云つて居る。處が後の北方に於ける征服は此の認識を塗抹してしまつた。併し今や再び平等な人々の間の正義が第一義の德となりつゝある。而して未來に於ては正義は自己保護の上にではなく、併し同情的社會の上に確立されねばならぬものである。そして、正しい結婚が自由の德の學校となるであらう。

13

多數の結婚した人々は今日は平等の精神に於て生活して居ると信じてゐる。併しさう云ふ人達は彼等に害をなさぬ今日

の法律が他人にも害をなさぬと結論してはならぬ。實際に權力を施行し得なければ得ない程人は法律上の權利を益々要求するものである。法律上女が奴隷である事が下等な階級、動物的人間をして妻を虐待せしめる。

14

クリスト教が夫に優しい心を持たせようとしたと云ふのならばセント・ポールの命令即ち『妻よ汝の夫に從へよ』と云ふ言葉は婦人に法律上の服從を強いたと答へられる。若し、そうだとすれば『奴隷よ汝の主人に從へよ』と云ふポールの命令は奴隷制度を贊成した事になる。併し乍ら現行法に服從する事と其の法律に贊成する事とは別である。法律が續く間は法律に從ふ事が正しい事である。而して又その法律を排する事に對して運動する事も正しい事である。クリスト教は進步した國民の宗教であつた。何んとなれば此宗教は現行法を變へる事を目的とせぬ時に於てゞすらも、法律の改正には反對しなかつた故に。

15

婦人の財産に關しては、婦人の相續財産或ひは利益は結婚に於ても結婚以前と同樣に其婦人のものである事は私が今迄主張し來つた一般原則から結論出來る。感情の統一が存在する時にのみ財產の共同が存在する。

16

財産權は他の事柄には何等の關係もなく妻にたやすく許され得る。斯樣なる權利は既に米國の諸州に於て與へられて居

る。財產なくして夫が家庭の收入を得て居る場合には家庭を監督する妻は正當な分業に於て彼女の職務を果して居るのである。若し妻が子供を生み育て而して家事を取る以外に收入を得るならば恐らく子供と家庭は其れから苦しまねばなるまい。不公平な社會の狀態に於ては女は斯ふ云ふ窮地に處して行かねばならぬかも知れぬ。併し斯ふ云ふ仕方は夫をして一層自己の權力を濫用せしむるやうになるかも知れぬ。金を儲くる力が女の威嚴に必要である。併し乍ら若し結婚が平等な契約であるならば、そして、正しい條件に依て離婚が出來るならば、或は婦人が凡ゆる職業に解放されて居るならば、婦人は結婚生活中賃銀を實際に儲ける必要はないであらう。

選擧權と黑婦人

二千五百萬人の亞米利加婦人が今度選擧權を得たのであるが、其のうちの三百萬人は黑婦人である。今日迄、黑人男子は普通選擧の行はれてゐた米國に於ては白人男子と法律上は全然同等な市民であるけれども、故意に干涉されるため黑人男子の十分の九迄は選擧權を棄權してゐた。處で、今、米國婦人が選擧權を得たに附ひて黑婦人は如何なる待遇を受けたであらう。

黑婦人のうちには一流の大學を卒業したものも少なくない。戰爭中、男子が軍人としてと同じように米國市民としての黑婦人の働きは白婦人に優るとも決して劣りはしなかつたのである。又、黑婦人は、米國の次代の市民である黑人兒童の教育に衛生に貢獻する處も盡大である。處が、それ等の黑婦人が選擧資格登錄に行くと、白人の登錄係りは、何しに來たかと云ふように全く冷腑にかまへてゐて、後から〳〵來る白婦人を受けつけても、黑婦人を終日立たせて置いて空しく歸宅せしめたと云ふ。これに對して、白婦人の有權者はどう云ふ態度を取らうとするであらうか。

□□小學教員と母性□□

舊獨逸の教員は社會化したと云ひますが、社會化ではなく、國家化したのです。何にもかもが國家のために犠牲に供されたのであります。そして、あの強い軍國主義が成立したのでありますが、併し其の結果、社會の苦しみは大したものであつたでせう。で、社會民主々義が起つたのは其の反動ではなかつたかと私は思ひます。

獨逸の教育に反して、英米の教育は國家化と云ふよりも、むしろ、社會化であります。つまり、社會のためと云ふことが主になつて、殆んど誰でも教育を受けられるようになりました。

今、女教員の間に問題となつてゐる教員としての務めと、母としての務めとの間の矛盾に附いて、此れを獨逸のような精神から見ると、其の傾向は教員としての務めのために母としての務めが犠牲に供されなければなりません。けれども、英米のように社會本位に則ち個人に重きを置いて考へるならば個人の權利の方に重きを置くから母の務めの方が重く見られるようになりませう。國家本位、社會本位とそうはつきり區別がついてゐるわけではないけれども、とにかく、其の精神がそう傾いてゐるのであります。

一體教育の社會化と云ふことが現代の要求でありますが、併し教育を受けるもの、殊に、小學兒童は教育の價値を知りません。そして、多くの兩親も教育の價値を個人的には知つてゐても、併し、社會的の價値を認めません。其處で、教員は殊に小學校の教員は此の要求されてゐないものを與へればならぬと云ふ位置にあると思ひます。從つて、普通の需要供給の經濟上の原則では律することの出來ない高尙な職務であります。ですから、國家の見地からでなく社會の見地から見ると教員の職務には大分犠牲の要素が含んでゐますけれども、その犠牲の部分を殘らず取つてしまうことは教員の目的を破壞してしまいはしないでせうか?。れで、要するにいくらかの犠牲は止むを得ない、唯最少限度の犠牲から最大限度の效果を生み出すように、つまり、母として教員としての矛盾を全然とり去ると云ふのではなく、其の間の調和を計ると云ふのか問題だと思ひます。其の矛盾を全然取り去つてしまはうとすれば教員としての目的がなくなつてしまいはしないかと思ひます。

思ひ出

原田琴子

秋さればあるをもこふるゆふべ〳〵ふりにし人をしのばざらめや

私は子供の時からなんとなくこの歌が好きだつた。一飛びに山も河も野原も越えて何處まで吹いて行くのだらうあの風は、など〻思ひながらぼんやりと田圃道にた〻ずんで夕焼雲を眺めて居るさきつとこの歌が思ひ出せた。まだ幼ない時から幾人もの親しい人々と死に別れた私にはこの歌のこ〻ろが泌み〴〵と味はれた。そして傍らに咲いてゐる薄紫の野菊の花までにも妙に寂しい想ひをそ〻られたのであつた。兩親も祖父母も叔母もあり、家も豊かであつてその頃の私は文字通りの幸福兒だつたのに拘らず心はいひやうもなく寂しかつた。四五年もの間病みぬいたはてに消えるやうに死んで行つた二人の叔父が私には忘れ得られなかつた。私は叔父達と仲好しだつた、そして死なれてからは況してこひしさが深くなつた。

ほろ〳〵と啼く山鳥の聲きけば父かとぞおもふ母かとぞおもふ

といふ歌にもあつい想ひが寄せられた。私はよく叔父と一緒に山鳥を捕りに森の中へ行つたり河へ沙魚を釣りに行つたりした事があつた、その一つ一つの思ひ出が私の小さな胸を痛くした。

死んだ叔父達は何處へ行つたのか、私はそれを知らなかつた、基督教といふものを聽いたことも讀んだ事もなかつた私には天國といふものを想像すらし得なかつた。けれどもただ一つ幼ない私の信じたことは――叔父達はこの地上の世界とは違つた別な世界にゐて、やはり私を可愛がつてくれてゐるであらうことであつた、そして叔父達がこの世界に於て懷いてゐた希望の悉くを私の上に投げてゐるであらうことであつた。叔父達がこの世で用ひるべきであつた力は皆私に與へられてゐる、だから私は一層奮發しなくてはならない、學校の成績がよくなくてはならない――私はそれを信じてそして眞面目に勉强することが出來た。

○

私の生れた家は酒造を商賣にしてゐた。そして私は物心地がつくとから家の商ひがいやで〳〵ならなかつた。お酒は多くの場合人の心身を害するものである、それを賣るのは一つの罪惡ではないだらうか――私は左樣考へた。それは誰に敎へられた事でもなかつた。私の生ひ立つた鄕里にはお酒のために身の持てない人が多かつたから、いつとなく自然にそれを感じたのでもあらう。店の番頭なぞに向つて私はよくこの理窟を云つた。

「けれどKちやん、あなたはうちの商賣のおかげでかうしていゝ着物も着せてもらへるんですよ」

小賢しい私の言葉が癪にさわつたといふ風に番頭は聲を强めてかう答へた。

「私はいゝ着物なんかいらない」

「いゝ着物はいらなくても、商賣をしなければ毎日食べて行けませんよ、Kちやん、生きて行けないんですよ」

當時の私はさう言はれては一言もなかつた、たゞ云ひこめられたのが口惜しくてならなかつた、そしてお酒を造るのも賣るのも決していゝ事ぢやないといふ考へはその上にも强くなるばかりだつた。人間はいゝ事をするために生れたのだ、それなのに惡い事をする――人に毒なものをすゝめる――といふのは間違つてゐるではないか。私はこの理論を誰の前へ出ても恥かしくないと考へた。酒造ではなくなにかもつと人のためになることをして暮せばいゝ、私は父や祖父に向つてかう言ひたかつた。何かの折に言つても見た、がもとよりそれは一言の下に叱り飛ばされてしまつた。

○

秋の末から冬にかけて寒いから風が毎日吹き飛ぶ頃になると田舍はことにもの淋しい。咲く草花もなくみづ〳〵しい木の葉もなくて佗しい裸か木の外に見るものとてもない田舍は。

まゝごとにも繩飛びにも飽きはてゝ、ぼんやりと家の前に立つてゐる私に向つて店の若い番頭はよく「Kちやん、お江戸を見せませう」と言つた、そして小さな私をひよいと抱きあげて庇へとゞく位にまで高い〳〵をするのだつた。暫らくの間私は笑つたりふざけたりして戯れた、けれどそれも

ながくはつゞかなかつた、ふと氣がつくと町には風が砂埃をたてゝ荒んで居た、家は皆陰氣に戸を閉して居た、私の心は慰められやうもなかつた。

そんな時私はふと思ひつくと一さんに母の傍へ走つて行つて何か母の用をたさうとした。

『これを持つて行つて、これと同じものを下さいと云ふんだよ』

母はよくかう云つた。使ひ古した楊子を片手に握りしめて私は近所の荒物屋へ向つて驅け出すのだつた、自分はよい事をしてゐるのだといふ自信に全く滿足して。

性の研究は必要なことであります。今後の教育に性的教育の一課目を加へればならぬ事は夙に識者の認むる處であります。併し、それには範圍があります。

醫術に於ける婦人科の外科室には其の道の專門家だけが入るべきであります。研究の名の下に其の外科室に素人がドン／＼這入つて行くことは害はあつても決して益は無いのであります。そして、此の頃、流行する性の研究、戀愛の研究は大抵其の外科室へ素人を引き入れるていのものであります。これが人間の弱點につけこむものでなくて何でありませう。



小犬の不平

加藤ひさ

今日も又日向ぼつこをしやうと思ふてかY先生の家の三毛猫はノソ〳〵と茶の間から椽側へやつて來た、ふと庭を見ると自分よりやゝ小さい動物が居る、驚いてフーッと云ふと同時に前足をピタリと揃へ口髭を立て背を丸くして此の新入者をハッタと睨めた。全部が白で兩耳の廻りに茶の斑點ある比較的大きな腹をして居る小犬は至つて貧弱な尾をふりながら庭内を跳び廻つて居た、彼は此の樣子を見て其相手の何物であるか、又其態度が何を意味するかさへ知らないで只目を圓くして驚いたやうに三毛の方を見つめて居た。暫くこの睨み合ひは續いたが段々と相手が自分等の同階級のものであると知り合ふたか、又相手が自分を害するもので無い事に氣付ひたか、其の怒りの態度もやがて消えた。そして不思議そうに遠くから顔見合せて居た。次の日はより近くに、其次の日は一層接近して、月日のたつに從つて猫は犬がポチと稱ばれ、犬は猫が三毛と稱ばれて居る事を知るようになつた、そして仕舞には猫は椽側の端に犬は其下にさも睦しさうに遊びたわむれるやうになつた。

或る天氣の好い日曜日に先生の家族は皆外出した、勝手口の方では女中さんが何かコトコトとし



て居るのが聞えた。三毛は又日當りのよい椽側に出て來た、小犬も又其下へやつて來た。うらゝかな日光は靜かに疊の上迄さし込んで居た、先生の安樂椅子にも日は當つて居た、三毛は悠々と椅子に上り込んだ、そして居眠りを始めた。此の様子をじつと見て居たポチはクルリと廻つてはクンクンと幾度も泣いた、けれども三毛は一向頓着しない。堪え兼れてかポチはあたりに人の居ないのを幸ひヒヨンと椽側に上り込んだ、そして三毛の椅子に飛び上つた、三毛はびつくりした。

三毛『何をなさるのポチさん、びつくりしたわ、さー早く降りていらつしやい、誰れかに見付かると叱られますよ。』

ポチ『まー、そんなに云はないでもいゝじやないか、今誰れも居やあしないよ、それよりか僕は君がさうして毎日毎日大威張りで家中誰れに氣がねもしないで二階であれ階下であれ、先生の膝の上でも奥さんの膝の上でも君の好む所は君の坐所として暮して居るのが不思議でならないよ一體君はどう云ふ譯故があつて此の家にさうして威張つて居るのか其れが聞きたいよ。ねー、君だつて僕だつて同じ動物じやないか、それだのに君は家の中、僕は家の外、晝間はさうでもないが、僕の一番悲しく思ふのは夕方さ、家の中は電氣が點いて、火鉢には火が起つて何んて愉快だらうと思ふと雨戸はピシピシ閉められて僕は外でつくねんとして居なければならないんだもの。』



三毛『マーそんなにお云ひでないよ、みんな現在ばかり考へると不平も出ますがね、過去を考へたり、未來を思へばそんなに貴方のやうに不平も出ない筈ですよ。それはそれとして貴方は何處からお出でになつたの？』

ポチ『僕？　僕は恥しい話だが何處から來たのか知らないんだ。何んでも僕のうろ覺に依ると僕は母の胎内から出ると二三日は母の乳を呑んで居たやうだ、突然荒つぽい人間の手が僕を籠の中へ押し込んだと思ふとどん／＼と何處かへかけるのさ、ちよいと高い所へ上つたと思ふとチンチンゴーゴーと何んでもかなり長い間やつて居たよ、僕は驚いたの驚かないのつて全く地獄へでも連れて行かれるのかと思つたよ、そして其人間が又ちよいと低い所へ下りたと思ふとねチンチンゴーゴーは止んだ、そしてね、暫く又どん／＼歩き出したと思ふとね其奴が急に立ち止つてね僕を籠から引きずり出したんだ。』

三毛『マー可愛さうに、それからどうして？』

ポチ『何んだか知らないが兎に角狭い所から廣い所へ投り出されたから僕はホツと一息ついたねあたりを見廻すと眞暗でね、空を見れば今にも雨が降りさうなのさ、僕を連れて來た人間はと見るともう影も形も見えやしない、やがての事にポツポツとやつて來やあがつた、腹はへつて來る寢る所はなし、途方に暮れたが仕方がない其處にあつた塀の際へ身をよせて一夜を明か

したのさ、腹はへつて居るし身體は濡れ鼠だし、こんなみじめな姿を人に見られるよりは一層夜が明けないで呉れゝばいゝと思つた位ひさ、だけど天陽様は几帳面だ、やつぱり夜は明けたれ。僕はぶる〳〵ふるへて塀の際に屈んで居たが、いろんな人が通つても、どれもこれもさも卑しめたやうな顔をして只一瞥を與へて通り過ぎするのさ。』

三毛『強ち皆さんが貴方を卑める意味で見たわけでもないでせうよ。』

ポチ『今となりやさうかも知れないと思ふがね、其の時は何でも人間と云ふ奴は無情なものだと思つたね』

三毛『そんなに無情でもないわ、それからどうして？』

ポチ『どれもこれも僕がひもじい顔をして居たつてパンを一切呉れやうとする者もありやしない、だけど別に僕に迫害を加へる奴もないから僕はやつぱり其處に屈んで居たんだ、さうするとね人通りも餘程減つたと思つたらね、向ふから五六人の小供が棒を持つてワーワー云つて駈けて來たから僕を虐めに來たと思つて逃げ出さうとしたけれど、あんまり腹がすゐて居たもんだからよろ〳〵して途溝の中へころげ落ちて仕舞つたの。さうすると彼奴等がやつて來て棒で僕を突き廻すんだものたまりやしない。僕はもう虫の息になつて居たんだらう其先きの事は何んにも知らないよ。氣が付いて見ると僕はこの庭の中でやれ鰹節だのやれ牛乳だのと大騒ぎして居



るから何んだと思つたらそれは僕の爲の騷ぎなんだ、僕の體は古ブラッケットにつゝまれてあつたんだもの、僕はあつけに取られて仕舞つたね。』

三毛『マーそう？　ほんさうに貴方の命はあぶなかつたのね。でも、貴方はずいぶん御仕合せね、貴方は此處のおうちのものになつてから、まだ、間がないのに貴方はあんな結構なお家が出來て、丁度こゝから見るとお離家みたいだは。私なんか古くから居たつて別に私の寢所なんかありはしないわ。あなたは夜になれば彼處へ行つて誰れの干渉もなく大威張りで寢られるぢやありませんか、過去を思つたらそんな愚痴も云はれないぢやありませんか』

ポチ『所がだ、ネー君、君は經驗がないから分るまいが吾々は好い家があつたからつて、其れで幸福といふものぢやないよ、いくら好い家が自分のものだつて、閉め出されて中ではみんなが面白さうに話したり笑つたりして居るのを聞いてゝご覽、どんなに羨ましくて辛いかしれないよ、君なんか そして寢る時になれば 誰れかしらの床の中へもぐり込んでも 寢られるだらう？』

三毛『あら、あんな事を云つて、私は晝間はさも呑氣さうに見えませうけれど夜分までそんなに呑氣じやないのよ、何の緣故もないのにこうして置いて貰つてゐるのだし、又、此の家の人達の御恩に報いなければならないんですから。』



ポチ『へー、君も御恩になつて居るの？　御ねがひだから話してね、どうしたの君は何處から來たの？」

三毛『私この家で生れたの。』

ポチ『へー、ぢやあお母さんは？』

三毛は急に悲しさうに

三毛『私のお母さんはね何處からか貰はれて來たんですつて、何處からだか知らないけれど、それでね直きに私と私の二人の兄さんを生んだの、二人共達者でしたが寧ろ亂暴で困つた位ひでしたの、それでね三人でお乳を呑むものですからお母さんもずいぶんお腹がすいたと見えてね他所のヒヨ子を捕つて食べたんですつて、先生も皆さんも困つた事をしたと思つて居たんでしよう。すると或る日お母さんが變な顔をして歸つて來たの、何にも知らない私達はむやみにお乳を呑まうとしてすりよつて行つたの。さうするとお母さんは急にいやな聲をして表へ駈けだしたの。さうしてねバツタリ倒れて死んでしまつたの。』

ポチ『フーン、それぢや其時は君達はもう御飯を食べて居たの？』

三毛『イーエイーエ御飯どころですか未だ其時は足もしつかりして居なかつたの』

ポチ『フーン、それじやどうしたの』



三毛『エー、其れはもう奥様がね私達ヨチヨチして居る三人を毎日々々牛乳を筆の先きに含めて養つて下さつたの、其のうちでも私は一番弱くつてね坐つて居るとまるで顔が疊へ付いてしまつてね、それは死んで居るのか生きて居るのかなんて云はれたもゝのよ、ですから私がこれ迄になつたのも皆さんの丹精一つなのよ』

ポチ『フーン、そして二人の兄さんはどうしたの？』

三毛『一人は近所へ貰はれ、一人は田舎の方へ貰はれて行つたの』

ポチ『へー、人間は男を家へ置いて女を他所へやると聞いたが猫は女が家に居るものかねー、そして、男は養子にやられて辛い思ひをするのかねー』

三毛『イーエ、家に居たからつて養子にやられたからつて別に變りはありやしませんわ、只行つた者が行つた先きでの心掛け次第で辛い事なんか少しもありやしませんわ、養子は辛いなんて云ふのは行く人の根本精神が違つて居るからですよ』

ポチ『だつて君は男の兄弟をみんな他所へやつて置いてまるで女王かなんぞのやうにすまし込んで居るんだもの』

三毛『又あんな事を云つて、何も私がそんなに威張つて居るわけでもないのよ、私が弱かつたものだから、私がうちに居るやうになつたんですわ。私だつて此處の人達が情深いからつていゝ氣



になつて食べて寢てばかり居ればお仕舞には厭られるつて云ふ事位知つて居るわ、だから私は私の分相應な義務を果して居るつもりよ、』

ポチ『へー、義務つてどんな事？』

三毛『つまり自分に出來るだけの事でいゝから、居る家の爲になる事をするの』

ポチ『フーン、そんから君は何をするの』

三毛『まー見て御らんなさいこの家ではずいぶんいろんな物があるでせう、だけど鼠に食べられた物は何んにもないでせう、みんな私が夜になるとちやんと見張つて居るからよ。私が二三日留守でもして御覽なさい、障子は穴をあけられる、何んでもかでもたいなしよ、其の損害を防ぐだけでも私の役目は可なり有効よ。』

ポチ『フーン、そんなら僕も何んか考へてこの家の爲になる事をしたら君と同じやうに家の中に居られるやうになるだらうか。』

三毛『エヽー、それは出來ない事もないでせう、だけど駄目よ。』

ポチ『何故!!』

三毛『何故つて貴方は第一野性でらんぼうなんですもの、そら御覽なさい貴君の上つてきた跡を。泥だらけじやありませんか』



ポチ「だつて、外へ置かれりや足に泥がついてゐるのはあたりまへぢやないか。」

三毛「そりやさうだわね。たけど、その外にあなたにはいけないことがあつてよ。」

ポチ「アーアーいやだ〳〵。猫に生れないで、犬に生れたのは僕の罪ぢやありやしない。君だつて僕だつて同じ動物じやないか、それだのに君は疊の上でも蒲團の上でも自由自在に寢たり起きたりして居られるが、僕は何時でも椽の下だの家の廻りをうろついて居なけりやならないんだもの」

三毛「アラ、ようやく一人歩きが出來るやうになつたと思つたら、もうあんた生意氣な事を云つてゐるわ」

ポチ「そうさ僕だつて毎日先生の仰言るのを聞いて居るもの。」

三毛「そら、それがいけないの、貴君は自分の都合の好い事ばかり耳に入れるから不平が起るの、少しは自分の事を考へなければだめよ。」

ポチ「それや君は何不自由なくそうして可愛がられて居るから人の辛い事なんか少しも同情しないでせうよ。」

三毛「イーエ私はいつでも同情して居ますわ。」

ポチ「同情する？　そんなら僕も君と同じ待遇を受けられるやうにして吳れてもいゝだらう」

三毛「だつて貴方がお座敷へ上るとみんなが迷惑しますもの」



ポチ『何故？』

三毛『何故つて私なんか家の中に居たつて何一つ損めやしませんけれど、あなたが一寸上つて御覧なさい座敷は泥だらけになる、疊は切れるんですもの、あなたが疊の上へ來るとまるで嵐のようだわ、ガサ／＼大きな音がして。そして御飯を食べる時はまるで幾日も食べずに居たやうな食べ方をするんですもの、ガツ／＼／＼音をさせて。』

ポチ『だつてそれや仕方がないよ僕等の性質なんだもの』

三毛『だからそれがあなたの性質だから、あなたはそんなに私を好まないがいゝじやありませんか』

ポチ『だつて同じ階級に生れて別扱ひにされるのはいやだからさ。』

三毛『いやなら人にいやがられるやうな事を止したらいゝでせう』

ポチ『そんならこれからそうしやうかしら、だが僕達の仲間が今迄して來た長い間の行動が人間の頭にしみ込んで居るからそれを取り返さうとするには中々用意じやないや、取り返さう取り返さうとあせつて居るうちにや僕等の命は終つてしまふね、やつぱり僕は一生土の上の生活で終るのかねー、』　其時表の格子戸の鈴はリンリンと鳴つた。ポチはあわてゝ飛び下りた。先生の御歸りだ、犬は椽側の下からおびへたやうな目付きをして先生の顔を見て居た。猫は半分氣の毒さうな半分輕蔑したやうな目付をして犬を見下して居た。

編輯を終りて

『小犬の不平』の作者は英文の速記者として外國人の商會に勤めてゐる私の妹で御座います。筆は拙いと思ひますがポチと三毛の身上話は私の家庭内の事實談で、此の文章は妹の三毛に對する愛情ポチに對する憐愍の流露でありますから其れを聊か尊敬致しまして掲載致しました。御笑讀下さいませば幸ひに存じます。

十一月六日の朝上野を立て私は始めて日本帝國を横につッきつて日本海の沿岸へ出ました。柏崎越後タイムス社に招かれて講演に行つたので御座います。社の方達とゆつくりお話する暇はなかつたのですが、併し、其の方達があの地方の首腦、指導者であられることは充分感じました。財力と智力が兼れ備はらなければ指導の任に充分當る事は出來ませんがあの方達には先づそれが或る程度迄完備してゐると思ひました。直江津から向ふは行きも歸へりも暗かつたゝめに海が見へないで殘念でしたが其處から稍離れた處では田畑に働いてゐる農夫達が見へました。智識階級の方達にも勿論私は親しみを感じるのでありますが、いつも土にシがミツイてゐる農夫達には一層懐しみを感じるので御座います。『女房（おかみ）さん達は早く御かへり、お子達が待つてゐる大變寒いようだから。』などゝ聞へぬながら云ひかけるのでありました。

■今年もいよ／＼暮れようとして居ります。皆樣と一所に農夫達も一所に新しい年を迎へるためにより有意義なもう一歩を踏み出すためにこれから用意に取りかゝりませう。

本誌定價表

一册	金二十五錢	送料五厘
六册	前金 金壹圓四十錢	（送料共）
十二册	前金 金貳圓七十錢	（送料共）

○誌代及郵税は前金の事○郵券代用は五厘切手にて一割増○廣告は御照會次第御相談いたします

大正九年十一月二十三日印刷納本
大正九年十二月　一日發行

東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京神田區仲猿樂町十七
印刷人　大杉直次郎

東京四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會社
振替東京五三六八八

□□□再版豫告□□□

山田わか著

戀愛の社會的意義

四六版 三百三十頁
定價 金貳圓
送料 拾貳錢

□□□新刊豫告□□□

ジヨセフイン、シヤイン女史著
山田わか
加藤ひさ 共譯

婦人と參政權

四六版クロース美本
定價約一圓二十五錢
送料 拾貳錢

目次大要

過去の影響――婦人參政權の發達――婦人參政權の意義――婦人參政運動の進步――反對說に對する答――進み行く傾向

發行所
東京市四谷區南伊賀町四一
振替東京五三六八八
婦人と新社會社

大正九年十一月一日發行
大正九年十二月二十三日納本
大正九年二月二十三日第三種郵便物認可

